

著||グードルン・パウゼヴァング
訳||高田ゆみ子

見えない雲



タツチブックス―**見えない雲** 一九八七年十二月二十日初版第一刷発行 一九八八年五月一日初版第二刷発行

著者||グードルン・パウゼヴァング/訳者||高田ゆみ子/発行者||相賀徹夫

発行所||小学館 〒101-01 東京都千代田区二ツ橋二-13-1/(振替東京8-200番)

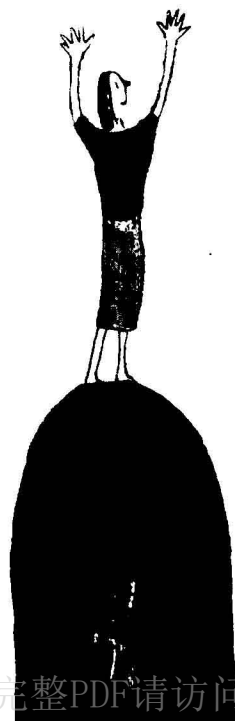
電話||編集03(230)5804・業務03(230)5333・販売03(230)5768/印刷・凸版印刷株式会社

造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一落丁乱丁などの不良品がありましたらお取りかえします。

©SHOGAKUKAN 1987 Printed in Japan ISBN4-09-381302-7 定価七八〇円

何も知らなかったとはもう言えない

著||グーデルンパウゼヴァング 訳||高田ゆみ子
見えない雲



小学館

© 1987 by Otto Maier Verlag Ravensburg
Original German title: DIE WOLKE
Author: Gudrun Pausewang
Japanese translation rights arranged
with Otto Maier Verlag Ravensburg
through Fellow Network Inc. Tokyo.

ブックデザイン＝坪内祝義(TOKIデザイン室)

イラストレーション＝沢田としき

編集協力＝手塚 邑(立夏社)

目次

1	■ 突然サイレンが鳴り響いた	7
2	■ 自転車で逃げまじよう	27
3	■ 雲みたいなのが見えるよ	42
4	■ ウリも一緒でなきや……	62
5	■ 激しい雷雨だった	77
6	■ どつやつて元に戻るっていうのよ	89
7	■ 髪にはさわらないで	103
8	■ 隠すものなんて何も無いもの	126
9	■ ヒバクシヤですってっ	146
10	■ 毎日を一生懸命生きなくちゃ	166
11	■ みんな物を売り払おうとしている	179
12	■ これからは先のことだけ考えるのよ	194
13	■ 引っ越しが始まった	210
14	■ 結局は自分のことしか考えてないんだ	225
15	■ ウリのいる菜の花畑へ	237
16	■ ゆっくりと轡子をとって	249
	訳者あとがき	261



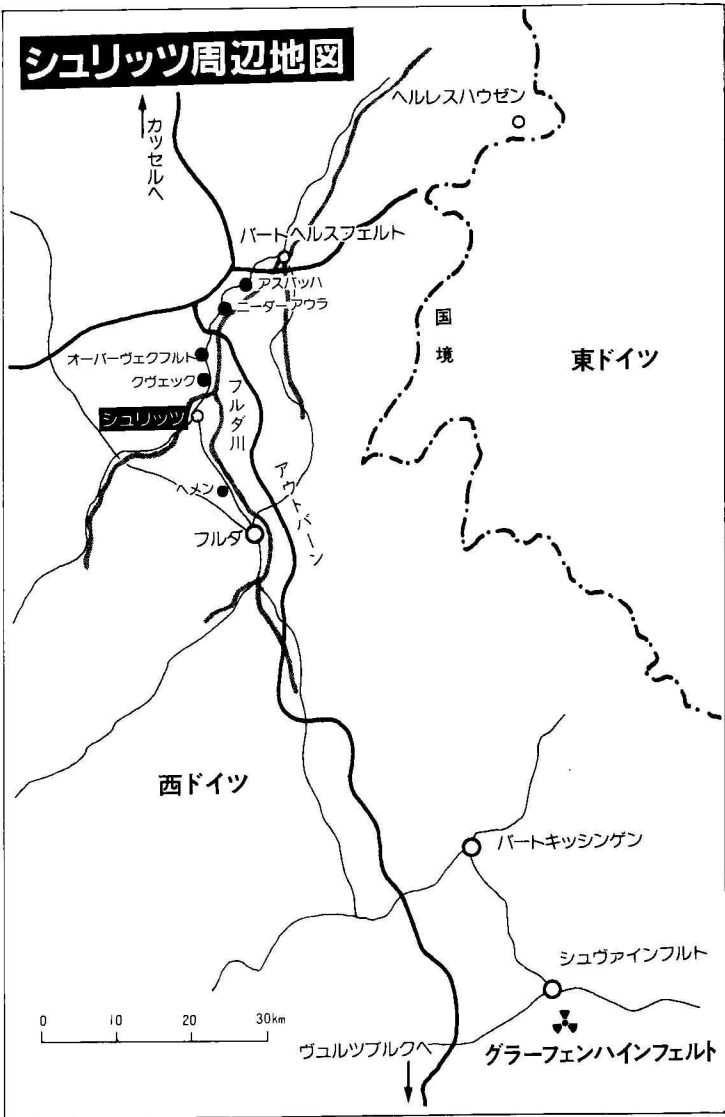
この物語に登場する人々

- ヤンナ-ベルタ——主人公。シュリッツに住む金髪^{きんぱつ}の十四歳^{さい}の少女。
- ウリ——ヤンナ-ベルタの弟。小学二年生。
- カイ——ヤンナ-ベルタの弟。二歳^{さい}。
- ベルタ——ヤンナ-ベルタの父方^{ちちは}の祖母。
- ハンス-ゲオルグ——ヤンナ-ベルタの父方^{ちち}の祖父。
- ヨ——ヤンナ-ベルタの母方^{はは}の祖母。看護婦^{かんごふ}。
- ヘルガ——ハンブルクに住む、ヤンナ-ベルタの父の姉。教師。
- アルムート——ヤンナ-ベルタの母の妹。教師。
- ラインハルト——アルムートの夫。教師。
- パプス——ラインハルトの父。
- エルマー——ヤンナ-ベルタのクラスの優等生^{ゆうとうせい}。
- イングリッド——ヤンナ-ベルタの友達。
- ラルス——ヤンナ-ベルタの学校の上級生。
- ティナ・ホフマン——ヤンナ-ベルタの小学校のときの同級生。
- ホイブラー——家——バートヘルスフェルトへ行く途中^{とちゆう}で知り合った家族。
- アイゼ——救急病院^{きゅうきゅうびん}で同室となったトルコ人の少女。
- テュネス——ケルンから看護^{かんご}のためにやってきた若者。
- フリーメル夫妻——ヘルガの家に避難^{ひなん}してきた、祖母ベルタの親戚^{しんせき}。

突然サイレンが鳴り響いた



シュリッツ周辺地図



その金曜日は朝から強い風が吹いていた。ヤンナーベルタは窓から吹き込む風に誘われるようにして教室の外へ目をやった。風にそよいだ白樺の若葉が太陽の光を受けてキラキラ輝き、枝の影が中庭のアスファルトの上で揺れている。向かい側の校舎の屋根にはまるで雪のように桜の葉が降りそそいでいる。空は抜けるように青く、真つ白なちぎれ雲が綿のように浮かんでいた。五月にしては珍しく暖かい朝だった。空気も澄み、はるか遠くまで見渡せた。

突然サイレンが鳴り響いた。フランス語のベンツィヒ先生は次の課の説明をしていたが、ことばを中断してちらりと腕時計を見た。

「十一時九分前か」先生は言った。

「警報訓練にしては妙な時間だな。新聞には何も出ていなかったはずだが」

「きつとABC警報だよ！」クラスの優等生エルマーが大声で言った。

「いや、おそらく新聞の記事を読みすぎしたんだろう。さあ、次に進もう」先生は言った。

しかしそのとき、スピーカーが割れるような音をたてた。クラス全員が教室の戸口の上にある小さな四角い箱を見あげた。聞こえてきたのは、いつもの秘書の女の人ではなく校長先生の

*ABC警報 西ドイツではABC兵器(Allatomar 核兵器、Billogisch 細菌兵器、CII chemisch 化学兵器)による攻撃に対する警報がすでに定められている。

声だった。

「たった今、ABC警報が発令されました。授業は中止します。生徒は全員ただちに家に帰りなさい」そのあとも校長先生の声は続いていたが、大きなどよめきにかき消されてしまった。みんなは窓に駆け寄って外のようすをうかがった。

「何があったのかしら？」仲良しのマイケがたずねた。ヤンナーベルタは首を横に振った。彼女はずっと手が冷たくなるのを感じていた。

何かが起こった。いったいなんなのだろう？ ヤンナーベルタは弟のウリのこと気がになった。

「とりあえず全員すぐに帰りなさい」ペンツィヒ先生は言った。

廊下のほうからいろんな音が聞こえてきた。悲鳴、パタパタ駆ける足音、ドアのボタンと閉まる音。

「いったい何があったんですか？」ヤンナーベルタは先生にたずねた。

しかしペンツィヒ先生は肩をすくめて言った。

「私だってさっぱりわけがわからないよ。いいから急いで帰るんだ。でも、あわてちゃいかんよ」「きつと大事件だよ。命の危険にさらされるような」エルマーはそう言いながら、努めて平静をよそおっていた。

しかしペンツィヒ先生は首を振りながら言った。

「そんなことはまだわからんよ」

だれかがドアを勢いよく開けると廊下^{ろうか}に飛び出した。すると、ほかのみんなもあとに続いた。廊下^{ろうか}はごったがえしていた。流れに逆^{さか}らって右往左往^{うおうさおう}している生徒^{せいと}もいた。ヤンナーベルタは隣のクラス^{となり}のイングリッドがいるのを見つけた。イングリッドはローンの山のほうに住んでいる子だが、休み時間には彼女^{かのじよ}と一緒にいることが多かった。

イングリッドはヤンナーベルタに大声で言った。

「ウトリツヒハウゼン行きのバスはないの！ 次のは一時間半もあとだから、家に電話して迎えにきてもらうわ」

しかし事務室^{じむむ}の前には生徒^{せいと}たちが殺到^{さつどう}していて、電話の順番^{じゆんばん}が回ってくるまでずいぶん時間^{かん}がかかりそうだった。ヤンナーベルタはイングリッドのそばへ行こうとしたが、階段^{かいだん}のほうへ押^おし寄^よせる人波^{ひとなみ}にはね返されて近づくことができない。ヤンナーベルタはマイケの腕^{うで}をしっかりとつかんで、後ろから押^おされるようにして階段^{かいだん}を一段ずつおりた。騒ぎ^{さわぎ}はどんどん大きくなった。玄関^{げんかん}前のホールでだれかが叫^{さけ}ぶ声が聞こえてきた。

「グラーフエンハインフェルトだ！ グラーフエンハインフェルトで事故^{じこ}があつたんだ！」

ヤンナーベルタは驚^{おどろ}いた。グラーフエンハインフェルトですって？ 確か原子力発電所^{たし}のあるところじゃなかったかしら？ 校舎^{こうしゃ}の外に出ると、小学五年生のチビっ子^{ちびっこ}たちがあわてたように横^{よこ}を走り抜^ぬけていった。彼ら^{かれ}は右左も見ずに通りを横切ったので、走ってきた車は急ブレ

ーキでタイヤをきしました。運転していた人は気が狂ったように警笛を鳴らし、子どもたちをどなりつけた。その人はまだ何も知らないようだった。

ヤンナーベルタは横断歩道まで来ると、途方にくれてしまった。

「私もバスがないわ」彼女と言った。

「途中まで一緒に来れば？」マイケが言ったがヤンナーベルタは首を横に振った。

「じゃ、シュリッツまで歩いて帰るつもりなの？」

「両親は二人ともシュヴァインフルトへ行ってるの。パパは会合で、ママとカイはヨーおばあちゃんち。明日帰ってくるようになってるんだけど。家ではウリが一人で待ってるからとにかく急いで帰らなきゃ」ヤンナーベルタは答えた。

そのとき、ラルスが通りかかった。ラルスはシュリッツに住んでいる上級生で、いつも車で学校に来ていた。

「ヤンナーベルタ！ 乗っていくかい？」とラルスは声をかけた。

ヤンナーベルタはうなずくと、マイケにさよならを言い、大急ぎで車を追いかけた。

車には、やはりシュリッツから通っている男子生徒が三人乗っていた。みんな上級生だ。ヤンナーベルタが助手席に乗り込むと、シートベルトをつけ終わらないうちにラルスは車を発進させた。

「シートベルトなんてしなくていいよ。今日なら窓から足を突き出したってだれが気にするも

んか。とくに警察はそれどころじゃないさ」とラルスは言った。

「急に家へ帰すなんて、きつとスーパーガウに違いないぜ」後部座席の上級生が言った。

「こんちくしょう、カーラジオがこわれてるぞ」ラルスはぼやいた。

スーパーガウ？ ヤンナーベルタは思い出した。ずっと前のことだったが、ソ連の原子力発電所で事故があったとき、みんなガウということばを口にしていた。それも何週間ものあいだ、いろんなところで聞かされた。

当時ヤンナーベルタはまだ小学生で、先生は「レム」や「ベクレル」や「放射線」などのことを説明しようとしていたが、結局よくわからずじまいだった。彼女が唯一覚えたのはその原子力発電所の名前だけだった。それはチェルノブイリといった。

その後、空や地面、そしてどういふわけか雨も汚染されてしまったことを聞いた。だから、雨が降ると休憩時間に校庭に出てはいけなと言われた。それは納得できた。

しかし放課後、その毒の雨の中を家に帰りなさいと言われたことがあった。そのとき、ヤンナーベルタは校舎の外に出たくなと言いはって泣いた。だって、雨には毒があると先生は言

*レム 人間の浴びた放射線量を、人体への効果を考えて表すときに用いる単位。

*ベクレル 原子が一秒間にこわれて出る放射能の量。

ったじゃないか。仕方なく、近くの町に住んでいる先生が泣き続けるヤンナーベルタを車に乗せて家まで送ってくれた。帰ると祖母のベルタは「バカな子だね。雨は毒なんかじゃないよ。先生がバカなことを言ったんだよ」と言った。

ヤンナーベルタは今、十四歳。高等中学の五年生になり、あのときよりもっといろんなことがわかるようになった。スーパーストリーというのは、原子力発電所から放射能が人体に危険な量を超えてもれ出ることだ。そしてグラッフェンハインフェルトには原子力発電所があった。でも、ここからのくらしい離れているのだろうか？

ラルスはマリエン通りを通る近道をとった。そうすれば、四か所の信号を避けることができるのだ。まわりは閑静な高級住宅地だったが、その日はラルスのおんぼろ車の前にも三台の車が走り、ラルスだってすでに六十キロ以上のスピードで走っているのに、後ろからはひっきりなしにクラクションが聞こえていた。

後部座席の上級生たちは、グラッフェンハインフェルトの原子炉の型や、そのような原子炉ではどんなことが起こりうるかということについて議論を始めていた。「チェルノブイリ」「スリーマイル島」「燃料棒」「冷却水」「耐圧容器」というようなことばが何度も飛びかっ

た。
ヤンナーベルタにはこの四人の上級生たちが原子力問題の専門家のように思えた。彼女は物理にはそれほど興味はなかったが、原子力発電所が危険になりうるということぐらいは知って

いた。

チェルノブイリ事故のあと、ヤンナーベルタは何度か両親と一緒にデモに参加したことをよく覚えていた。

あのときは両親と祖母とのあいだで大げんかがあった。祖母のベルタと祖父のハンス・ゲオルグは、今やもう原子力なしにはやっていけないのだと主張した。原子力は車やテレビと同じように現代生活の一部なんだ、チェルノブイリのような事故はドイツの原発では起こりえない、というのが彼らの意見だった。二人は、デモで何かを動かすことなんてできっこないし、デモなんて夢想家と過激派のお祭りのようなものだと言っていた。

祖母はヤンナーベルタの母をよく思っていなかった。息子はこの嫁のせいで、くだらないことを考えるようになったのだと思い込んでいた。

祖父は事あるごとに言っていた。

「私たちはハルトムートを実現の上に立ったものの考え方ができるような人間に教育したつもりなのに、それがこのぎまだ！」

マリーエン通りがニージガー通りに合流する所で車が渋滞していた。ふだんは渋滞するは

*スリーマイル島 一九七九年三月二十八日、米国ペンシルベニア州のスリーマイル島原発で冷却装置の故障のため原子炉が高温高压状態になり、大規模な放射能もれ事故が起こった。